

総合科学としての地理学の授業

教育学部 宮岡 邦任



1967年埼玉県飯能市出身。専門は、水文学(スイモンガク)・自然地理学。1997年に講師として本学に赴任。当時は三郷市に住んでいたが、元々山育ちのためかあまりの土地の平坦さと緑の少なさに馴染めず昨年秋に川口市に転居、沖積地と洪積台地の最大約20mの起伏と江戸時代から続く植木農家の緑に囲まれ住環境を充実させるとともに、勤務も3年目に入り職場環境にもますます慣れ親しみ(?)、研究もいよいよ本格的に再開!、といきたい今日この頃である。(みやおか・くにひで)

地理学はフィールドワークの学問である、といわれている。多くの要素が複合して出現した様々な人文・社会・自然現象に対して、その原因を探求していくといういわゆる逆問題的な研究スタイルは、地理学をはじめとする地球科学独特のものである。そこには、基礎知識はもとより、読図能力、図作業・解析作業の迅速さと正確さ、フィールドワーク能力、体力など様々な要素の蓄積が必要とされる。本稿では、私の担当している専修専門科目をいくつか紹介したいと思う。

1. はじめに

地理学とは人間活動と自然環境の関係を研究する学問分野である(地理学事典、二宮書店)といわれており、大きく自然地理学、人文地理学、地誌学に分類することができ、さらに場合によっては地誌学を自然地誌学と人文地誌学に分けることもある。このように、自然・人文の両面の要素を内包していることから、いずれかの方角からアプローチをかけると、単に自然あるいは人文現象の解明に止まらず、様々な学問分野を研究手法とした多角的な解析が要求される。社会が複雑化している現在、地球温暖化に代表される様々な環境変化や度重なる自然災害は、もはや単一学問領域での解明はほとんど不可能であり、その意味では将来的に実学的側面も併せ持った地理学が担うべき役割は計り知れない(と地理学者、少なくとも私は信じている?)。

さて、本学の地理学に関する科目はどのくらい設置されているかを考えてみると、私の今年度の担当科目は、専修専門科目が「地理学概論Ⅰ、Ⅱ」(一年生、各約40名)、「地理学調査法演習」(二年生、約40名)、「自然地理学」(三年生、約50名)、「地理学特殊講義」

(四年生、約30名)、「社会科演習Ⅰ、Ⅱ」(三、四年生各約10名)、この他に人間科学部で「地理学」(二年生、約30名)、「地誌学」(二年生、約30名)、生活環境学(三年生、約40名)といった構成になっている。この他にも人文地理学分野、あるいは社会科概説や教育法などでの地理学的要素を含んだ科目も含めれば、本学の地理学に関する科目は地理学科を単独に持たない状況、スタッフの数などを考えると案外多いのかも知れない。

2. 授業の方針

私の場合、幸いにも各学年ごとに何らかの形で授業が設置されているので、4年計画で地理を仕込めば相当のレベルまで引き上げることが出来るだろうとの目論見から、各学年での授業がすべて一本で繋がるように私なりに考えている。つまり上述した科目をとおして、地理学とはそのような学問分野なのか、どのような領域を含んでいるのか、そしてその方法論は、というようなところを理解してもらうこと、できるだけ身近な地域に密着した形で題材を選び、地理学を通して日常生活や地域に接することなどを目標にして授業に

臨んでいる。その際に地理学の研究を行う以上、必ず必要になるであろうフィールドワークをなんとしても各授業で一度は取り扱いたいと考えているが、授業の進捗状況によって必ずしも毎年うまくいくとは限らない。その場その場の判断で授業を組み立てなくてはならないこともかなりあり、結果シラバスとは全く展開の異なる授業を行うことも多く、学生アンケートでもこの件の苦情が非常に多かった。これは、シラバス作成後も教員自身が現在進行形で研究や教育に関して試行錯誤している証であり、毎回の授業直前において「現状でこの内容がベスト」という判断を下している教員の努力という点を学生諸氏には汲み取っていただきたいと思う。私自身はベテランの教員の方々のような話術もパフォーマンスもできないので、地理学の面白さを植え付けるにはどうすればよいかというところを基本に置き、「文教大学では私の授業でしか経験出来ない内容」をモットーに日夜格闘を繰り返している次第である。それでも出席だけはよほどのことがない限りとらないようにしている。というのは、私の大学時代の経験から言うと、面白い授業、為になる授業は出席の有無に関わらず学生は出席していたし、出席重視の授業でも内容がつまらなければ出席していなかった。そのあたりの判断は大学生にもなれば個人の判断にゆだねるべきだと思うし、仮に私の授業が出席をとらないことによって大幅に聴講者数を減らす結果になれば、それは学生の無言の抗議として真摯に受け止め何らかの形で改善するべきであると考えているからである。一方で本シリーズ No. 9 上で加藤先生も記されているように、出席の少ない学生が試験の点数がよくて毎回出席の学生より評価がよくなるという事態が、私の授業においても可能性としては存在する。そこで、授業内で課すいくつかの実習レポートの内容も考慮し、総合的に地理学を体系づけて理解しているかに関して評価を行っている。この方法で行くと、現在のところ最終的な評価と出席状況（教壇からの印象に過ぎないが）はある程度相関関係にあるのではないかと思わ

れる。ただ、大学における個々の地理学の授業がその内容全てを網羅しているわけではなく、学生に何らかの研究のヒントを提供するための断片の一つに過ぎないと私自身は考えている。その意味ではすべての授業を満遍なく受け身的に無難にこなすのではなく、目標あるいは問題意識を持ってそれぞれの授業をどのように利用し将来の糧にするかといった積極的なスタンスを持って学生諸氏には授業に臨んでいただきたいものである。

3. 授業の内容

「地理学概論」では、第一に地理学とは？、第二に地形図の読図、第三に統計データの質と加工、といったところを徹底的に講義・実習している。とにかく授業を通して、地理学が複合的な領域を学問領域として持つ総合科学であるということを認識してもらう。二番目に挙げた読図とは、単に自分がどこにいるのか、あるいは目的地に行くにはどのようなルートを通ればよいのか、という次元のものではなく、地形図に作業を通して一枚の地形図に内包されている様々な情報をいかに読みとるか、ということである。具体的には尾根と谷の区分、土地利用区分（色塗り）、地形図を用いた簡単な計算等を行う。また、統計処理に関しては、例えば気温データを取ってみても全く異なった規模の地域において同じ地点数を対象に空間分布の傾向を比較したとき、それらの数値の持つ意味は全く異なってしまったり、使用した測器によっては機差補正の必要性もあり得る。さらに国勢調査のような国が発表する統計においても調査年によっては調査対象や基準が若干異なっており、一様に比較検討することが困難な場合がある。そして、生データを入手してもデータを加工して理論的な組立が出来なければ、ただの数字の羅列になってしまう。そこで、データを基にした作図の実習も併せて行い、データの質に合った図面作りと解析手法の習得を目指している。

「地理学調査法演習」は前年度までは約 40 名の学生を半分に分けた半期完結の授業で、

前年度の地理学概論での達成度をふまえて毎年内容を変えている。昨年度は主に、あるテーマに基づいた地形図の読図による解析、もしくはあるテーマを設定して各自が簡単な文献および現地調査を行ってまとめたものについて発表を行っていた。学期末には、半日程度の巡検を実施し、実際に地形図を手にして現地において地理学的風景を見て回ることになっている。これまでに、隅田川（浅草－浜離宮－築地）、国分寺崖線（国分寺－井の頭公園－渋谷）、立川断層（矢川緑地－羽村－青梅）の各巡検を実施している。各コースにはいくつかの自然・人文地理学的な見所を設けてあり、各所において教員が5～10分程度の説明をするという形式をとっている。授業内のデスクワークと巡検については、出来るだけ同一地域とテーマを設置したいのが本音ではあるが、大学周辺に限定して考えると浅学な私ではネタがあつという間に尽きてしまうので、普段の演習ではどうしても教科書的な全く異なった地域を対象とした内容になってしまう。従って、学生によっては普段の授業と巡検が全く異なった視点の下に行われているかのように感じる者や、訳が分からず単なる遠足で終わってしまっている者もいる可能性は否定できない。この授業も今年度から半期一コマのみの開講となり、受講人数が倍増したことから、さらに巡検の実施が困難になったため、新たな試みを展開せざるを得なくなった。今年度はテーマを「元荒川付近の環境」に絞り、文献検索から予備調査、現地調査、解析までの研究の流れを数名の班に分かれて一通り行う方向である。先日は予備調査として、各自が地理学的だと感じられる風景をスケッチするという課題を提示した。もちろん美術ではないので絵の上手下手はあまり問題ではなく、スケッチの中に寸法や特記事項を書き添えても一向に構わない。要はいかに問題意識を持って地理学的見地から描写が出来るかという訓練である。このような課題は唐突に提示されてもなかなかこなせるものではなく、普段から社会的現象や問題にどの程度関心を払っているか、その現状を認識してもらう目的も

ある。スケッチはOHPにより10分程度の発表を通し、問題の設定と意義などについて簡単な討議を行い、今後の本調査に向けての方向性を示してもらおう。将来的に私のゼミにおいて卒業論文にまで発展するようなものが出てくることを期待している。

「自然地理学」では、主に自然環境から見た人間生活と自然の関係を重視して授業を展開している。地形、気候・気象、水文の基礎知識も提示しつつ、地理学の実学的側面も併せて示せるような題材を選ぶようにしている。今年度は1997年鹿児島県出水市で発生した土石流災害についてその発生メカニズムをひもときながら周辺領域までカバーする形で講義を行った。当然、応用的な要素も多分に含まれ、地理学調査法演習あるいは地理学概論時に扱った内容の復習も含めて実習によるさらなる理解を目指している。

また、秋学期では実際に観測を行い、地域の自然を把握することを目的に、気候調査、河川調査を行う予定である。気候調査に関しては本学を中心とした約0.5km²の地域における気温、湿度、風向、風速の観測（写真）、水文調査に関しては、元荒川の数地点において河川流量および水質の測定をそれぞれ実施している。さらに、大学周辺のような沖積地に形成される微地形と土地利用の関連についての簡単な巡検も実施している。このような調査・巡検を通して、我々の生活が現在も自然的基盤上に成立している事実、都市化に伴う宅地と水辺周辺との環境の地域的差異等の理解を目指している。

その他に地形図読図の練習と体力増強をかねて大学周辺でオリエンテーリングを実施したことがある。しかしながらこちらの意に反して、ポイントを草で覆ってかくす者、訳の分からない場所に移動してしまう者が続出し、学生間の怨恨と彼らの心の貧しさばかりが露呈しただけに止まってしまった。

授業内の野外実習は、総体的に見ると学生には好評のようである。



4. おわりに

毎年のように変化するカリキュラムと急速に複雑化する様々な現象は、地理学の授業の組立にいろいろな意味で刺激を与えている。基礎的な知識・概念はさほど変化しないにしても、解析手法は非常に多様化しており、その意味で教員も常に試行錯誤を繰り返している。今後も社会的時流に乗った形での授業の展開を通し、地理学の社会的重要性が打ち出せるよう工夫を凝らしていくので、期待していただきたい。